

## 「春は花」

鳥取県 観音寺住職 吉本 修峰  
かんのんじ よしもと しゅうほう

ある春の日のことです。天気がいいので庭の掃除をしていると、お墓参りに来ていた方から「このきれいな花の名前は、何ですか?」と尋ねられました。しかし、もともと花に詳しくない私は、答えることができませんでした。

その日から、「お寺の周りに咲く花の名前くらいは、答えられるようになろう」とインターネットで調べたり、植物図鑑に目を通したり、まずは、春の花の名前を覚えるところから始めました。河津桜からはじまり、ソメイヨシノ、シヤクナゲにアイリス。春の花だけでも思っていたより多いのです。

ある日、植物図鑑と照らし合わせる為に、近所に咲いているヒメリンゴを見に行った時のことです。その日は強い雨の降る日で、飛ばされそうな傘を抱えて木に近づいてみました。そこには、純白のヒメリンゴの花が雨風にさらされながらも凛と咲いており、鮮やかな「命の輝き」を見せていました。植物は、与えられた環境から自分の足で離れることはできません。晴れの日も、雨の日も、風の日も、すべての縁を受け入れて生きなければなりません。それでも、季節がめぐれば花を咲かせただひたすらに「生命」を全うしているのです。

曹洞宗大本山永平寺を開かれた道元禪師様のお詠に、うた「春は花夏ホトトギス秋は月冬雪さえてすすしかりけり」とあります。この「すすしかりけり」とは、「非常に鮮やかに映る」こと、「はつきりしている」ことを意味します。静かに坐り、偏りのない眼で周りや自分自身を見つめることが出来たなら、その一瞬一瞬が非常に鮮やかに映し出されるということです。人間の「命」に目を向けてみると、楽しい時や、嬉しい時、悲しみの時も、迷いの時も、どんなときも変わらずに自らを生かそうと、心臓は休むことなく鼓動を打ち、肺は呼吸をしてくれています。それは、植物の命と同じように、ただひたすらに生命を全うしようとしている、私たちの「命の輝き」です。ありのままを見つめ、瞬間、瞬間の鮮やかな「命の輝き」に気付いていく、そこには、どのような環境でも心安らかに生きるヒントがあるのではないでしょうか。